

発句

鈴蘭や名曲喫茶残る町

典子

脇

鮎の解禁友と待ちわぶ

朱広

第三

悪しざまに言いつつ都会が好きにして

恵洲

年に一度の県人会へ

典

野良に餌やるは日課に明の月

朱

昨日刈らせし首筋の秋

恵

アンデスのもろこし畑雲早し

典

黄色いリボン笑まふ黒髪

朱

恋人は騎兵隊員名画なり

恵

溺れてもいい君の眼の中

典

漂着の孤島に洞窟たつき跡

朱

岩波文庫の褪せた一冊

洲

親の後継いで住職月冴ゆる

典

物臭血筋寝酒欠かさず

朱

横の字を縦に直すも機械にて

洲

てふてふ誘う夕べの散歩

典

惜別の流れ解散花筏

朱

春闘デモが馴れ初めにして

洲

二十年君に預けた主導権

典

ダウ平均に一喜一憂

朱

山奥に庵結んで隠者めく

洲

鳥の凶鑑や望遠鏡や

典

より高く天守伸び行く銀杏城

朱

記憶の底よりかの手毬唄

洲

熱帯夜顔の見えないぬらりひょん

典

塗り箸遣い心太食う

朱

世が世なら大伯爵家の当主にて

洲

紳士淑女は死語となりけり

典

金満の代議士夫妻月沈む

朱

紅葉散り浮き鯉肥ゆる池

洲

北欧の雲読みつつの冬支度

典

肘と肘組み交わす乾杯

朱

朗報はベースキャンプに無線にて

洲

木立を人に見せる陽炎

典

せせらぎをゆけばやがては花の門

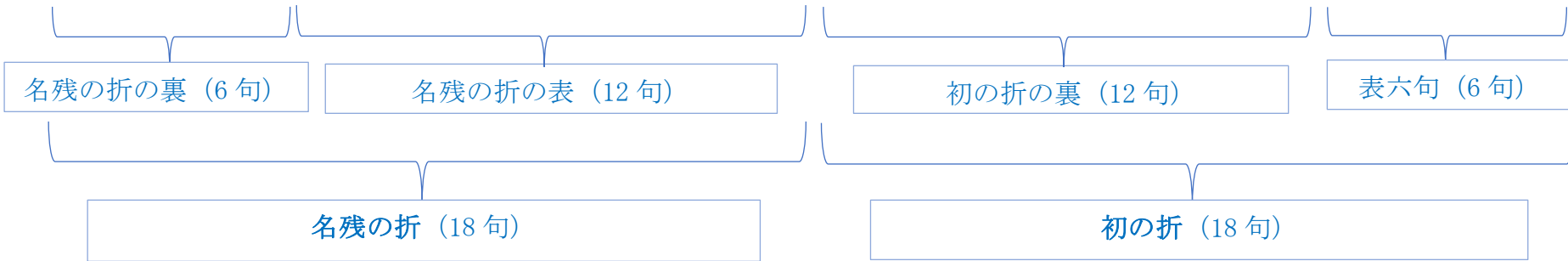
朱

梵鐘殷々暮れかねてあり

洲

挙句

洲



起首二千二十年五月 七日

満尾全

七月二十日